

「金色の石に魅せられて」

電子工学科 森宗 太一郎

学生の頃から乱読だったが、小説はあまり好んで読まず、雑心理学とか自然哲学、伝記などを好んで読んできた。物語というより、何か構造体を持つ内容に興味があるからである。それに自分の研究室に小説を置いていたら怒られるが、学問的な本であればそれらしく見えるので気にせず棚におけるところがよい（笑）。ここに書く依頼があったので近くの本屋に何度か足を運び、適当な小説を選んでみたがパツとしないので書くのは止めておくことにした。大体、休みの日まで出勤しなければならない程の仕事を抱えているのが実状で、この時期まともに本を選んでいる余裕すらない。現状では何を言っても若手教員の負担を減らすより仕事が遅いだけと一蹴されそうだが（笑）。

題にした本と出会ったのは大学院生の頃、22～3歳の頃である。当時所属していた研究室の主な研究対象がレーザー発振用の新素材開発で、その中でも三元系の化合物半導体に興味を持って勉強していた。応用だけでなく評価法もレーザー分光と言われる手法によって物質の中の電子の動きを調べ、より明るく光る新しい材料開発を行っていく。光の実験と言えはきれいがかっこよさそうといったイメージかもしれないが、実際は暗闇の中で見えない程の光を雑音と汗かき格闘しながら測定する。さらに地道で泥臭いのが材料作りでガラス細工をバーナーで行い、焼きなます炉や真空装置の中におかれた物質の状態を全く見えない外部で想像しながら手動で料理していく。この「作って」、「評価して」、「解析する」作業を繰り返し行いながら、「なぜこんな色で光るのか」や「なぜ変化するのか」などについて謎解きを行う。

何度か失敗をしたうえに徹夜が続き、こんな研究をして何か変わるのだろうかと思いついていた頃、実験すればするほど謎が増えている気がして息が詰まるような思いで逃げ出したくなったのか、大学の図書館で休んでいた。そのとき目についた本が佐藤勝昭先生著の「金色の石に魅せられて」であった。本と本の間に隠れるように誰にも借りられたことのないような本だったように思う。当時何も知らずに少し本をめくると、似通った材料の物理的現象についてのおもしろさを物語のように説いていた。その時は物理的内容よりも話の裏に想像できる苦勞したであろう著者の姿に共感と尊敬することで、慰めと同時に優しく励まされている感覚があった。その後何度か読み直してみたが、内容の意味が分からないところもあったけれど、少しでも理解できるとうれしくなり勇気づけられた。

恩師の一人にはこの謎解きの旅を「神に近付いているような気がする」という言葉で表現する先生もおられる。基礎研究をしていると自然の中の科学のおもしろさにふと気がつく瞬間があり、何度か止めようとも思っただけで困ったこと今のところ止められないでいる。先日、大学の恩師である故飯田先生の弔事の席でその著者である佐藤勝昭先生を生で拝見する機会があった。実は以外と近いところで結びついていることを師の偉大さと共に

感じ、今の自分の考え方や発想が多くの師や本に影響されていることを最近なんとなく実感している。